

## 第4章 週刊誌なのにヘア・ヌードをやらない

### 花田紀凱と文春の虎の穴

元木昌彦という男が、講談社の「ゴミ」を黄金に変える錬金術師だったとすれば、文藝春秋の「花田紀凱<sup>かずよし</sup>」という男は、さしずめ道場の真ん中にドカリとあぐらをかき、弟子たちを次々と叩き伏せている「武道の鬼師範」のような男だった。

二人は同時代を生きた。出版界という名の、仁義なき荒野で。

元木さんが『週刊現代』でヘア・ヌードという禁断の果実をむさぼり食い、部数を爆発させていた頃、花田さんが率いる『週刊文春』はどうしていたか。

沈黙していたのである。いや、正確には「脱ぐ」ことに対してだけ、頑<sup>かたく</sup>なに沈黙を守っていた。

これは奇妙なことだった。当時の週刊誌業界において、ヘア・ヌードはドル箱だった。やれば売れる。やらなければ負ける。そんな単純な力学が支配していた戦場で、花田さん

は動かなかった。

文春が品行方正な雑誌だったわけではない。政治家の愛人問題だの、芸能人の不倫だの、下世話なスキヤンダルは山のように扱っていたし、記事の中には濃厚な性描写だってあった。文字ではいくらでも「脱いで」いたのだ。

だが、写真では脱がなかった。

なぜか。

その理由を、言葉にして説明するのは難しい。おそらく花田さん本人に聞いても、「なんとなく」とか「文春らしくないから」といった、素っ気ない答えしか返ってこないだろう。だが、ぼくにはわかる気がする。

経済メディアも、特に、あれをやってはダメ、これをやってもダメということはないのだが、なんとなく違うなという分野は存在する。たとえば、グラビア、漫画、芸能報道だ。なぜダメなのかを明確にいうのは難しいのだが、なんか経済メディアっぽくない。だけれど、禁止と言いつけるのにはためらいがある。超人気アイドルを雑誌の表紙に使えば売れるからやれと言われたけれど、ぼくはやらなかった。

それは、「武道家が、喧嘩で隠し武器を使わない」という類の、痩せ我慢にも似た美学だ

ったのではないか。

ヘア・ヌードという武器は、強力すぎるのだ。誰が使っても勝てる。篠山紀信が撮ろうが、無名のカメラマンが撮ろうが、裸であれば男たちは群がる。それは「編集の力」ではない。「被写体の力」だ。

花田さんという男は、自分の腕力で相手をねじ伏せなければ気が済まないタチだったのかもしれない。写真という安易な飛び道具に頼って部数を伸ばしたところで、面白くない。「おれたちは、ペン一本で世の中をひっくり返すんだ」

そんな、ミステリアスで、厄介で、しかしとてつもなく熱い自負心が、彼をヘア・ヌードから遠ざけていたのだと思う。

いまの『週刊文春』を見てみると、ふとあの頃との「体温」の違いを感じることもある。いまの文春は、優秀だ。恐ろしいほどにシステム化されている。

ネットの発達により、「文春リークス」には毎日山のようなタレコミが届くという。不倫の証拠写真、LINEのスクリーンショット、内部告発の音声データ。情報は向こうから勝手にやってくる。

編集部の仕事は、その膨大な情報をいかに効率よく「処理」し、裏を取り、記事という

パッケージに加工するか、という点に置かれているように見える。

それは洗練された工場だ。ベルトコンベアの上を、スキャンダルという名の製品が次々と流れていく。品質は均一で、ハズレがない。

だが、花田さんの時代は違った。

情報は待っていても来なかった。記者がドブ板を踏み、夜討ち朝駆けをし、酒を飲み、時には殴り合いのような交渉の末に、やっとの思いでひねり出してくるものだった。

だからこそ、そこには「狩り」の匂いがした。

花田時代のバックナンバーの目次を丁寧に読み込んでいくと、一つ一つの記事に、編集部「執念」というか、作り手の「顔」が見えるのだ。

「なぜ、今、これを報じるのか」

その問いに対する答えが、理屈ではなく、怒りや面白がりといった感情として誌面から立ち上がってくる。

花田さん率いる現在の『月刊Hanada』を見ても、その視点の鋭さは変わっていない。世の中が同じ方向を向いている時に、「こっちの角度から見たらどうだ」と上から石を投げる。あるいはその逆をやる。

単なる情報の羅列ではない。「どこに着眼するか」という、編集者としての「目」の力が、そこにはある。

これこそが、今なお続く文春の「品格」の正体なのだろう。

内容からすれば、文春はゴシップ誌だ。海外でも「調査報道をしつかりするゴシップ誌」などと紹介されることもあった。

ゴシップ誌に品格などと言うと笑われるかもしれない。だが、花田さんの感性が、ただの覗き見趣味に墮ちるのをギリギリのところまで食い止めていた。

あらゆることを叩けばいいのではない。叩き方には流儀がある。

弱い者いじめはしない。権力を笠に着る奴は許さない。そして何より、「人間」への興味を失わない。

スキャンダルを暴くときでも、そこには対象へのある種の愛着や、人間の業に対する畏敬の念のようなものが微かに混じっていた。

システム化され、機械的にスキャンダルを処理すればするほど、雑誌はただの「暴露装置」になり下がる。

花田紀凱という男が持っていた、泥臭い「人間臭さ」こそが、文春を文春たらしめてい

た防波堤だったのだ。

ある夜のことを思い出す。

当時、花田さんは、ぼくのような若輩者や、他社の編集者たちを集めて、一種の「編集者のための私塾」のようなものを無償で開いてくれたことがあった。

打ち上げは、赤坂のそれなりに高級な中華料理店だった。

集まったのは、20人以上の若い編集者たちだ。みんな、飢えた狼のような目をしていた。花田紀凱から、その極意を盗んでやろうと息巻いていた。

花田さんは、どかっと腰を下ろし、紹興酒をあおりながら、若い編集者たちの愚にもつかない思い込みと主張をニコニコ聞いていた。

授業とも飲み会ともつかない熱っぽい時間が過ぎ、テーブルの上には空になった皿と酒瓶が散乱していた。

宴もたけなわとなり、いざ会計の段になったときのことだ。

赤坂の高級中華。20人の飲んで食っての編集者たち。当然、私たちのほうで払おうとした。しかし、花田さんはむしろ怒りを込めてこう言い放ち、自ら全額を払ってしまった。

「だめだ！」

当時、花田さんのもとで働いていた梶原さんの話によると、花田さんは講師として呼ばれている会であっても、講師代や車代の受け取りを当然のように拒否し、あろうことか打ち上げのお金まで払ってしまうこともしばしばだったようだ。

ぼくは震えた。

これが、花田紀凱という男か。

金に無頓着なだけかもしれない。あるいは、若手に飯を食わせることなど、呼吸をするのと同じくらい当たり前のことだと思っているのかもしれない。

だが、ぼくにはそれが、無言の檄げきのように感じられた。

「いいから面白いものを作れ、応援してるぞ」

そう背中を叩かれた気がした。

彼が求めているのは、マーケティングだのコンプライアンスだの、あるいは経費削減だのという、軟弱な技ではない。

「面白いか、面白くないか」

たったそれだけの、一撃必殺の「投げ」だ。

そのためなら、金も使う。体も張る。人生も賭ける。

そんな覚悟を見せつけられた夜だった。

花田さんが作り出すタイトルは、常に殺気を帯びていた。

花田流のタイトル術。その極意は「短く、強く」だ。

「考えてわかる」のでは遅いのだ。「読まずにはいられない」ように、読者の襟首を掴んで、無理やり誌面の中に引きずり込む。それが花田流だった。

その最高傑作とも言えるタイトルがある。

**エロを扱うときもウィットや不思議な品位**

● 愛をまさぐって、まさぐって 淀川長治・ベルトリッチ監督（1991年4月4日号）

● 樋口可南子さまの ヘアは醜うございます ワキ毛の女王 黒木香（1991年5月

2・9日号）

花田さんのタイトルを見たとき、ぼくは道場で一本背負いを食らったような衝撃を受

けた。

エロスを扱いつつも、そこにはウィットや不思議な品位が保たれていたからだ。ただの下世話な煽りではない。その言葉があるだけで、読者の脳裏には、映画のワンシーンのような情景や、凜とした美意識、あるいは人間が持つ滑稽なほどの熱情が浮かび上がる。

たった一言で、世界を作る。これが「言葉の投げ技」だ。

こうした表現の妙は、女性読者が安心して手に取りやすい空気感を生み出した。それは現代の『週刊文春』にも脈々と受け継がれている。文春のライバルは『週刊新潮』だと一般には思われがちだが、実態は少し違う。POSデータを詳細に分析すると、実は『女性セブン』とも激しく読者を奪い合っていることがわかっていく。

もう一つ、ずっと気になっていたタイトルがある。

●蔵相こそ証人喚問せよ 橋本龍太郎金庫番の恥知らずな行状（1991年9月5日号）

橋本龍太郎元首相が大蔵大臣（現在の財務大臣のこと）の記事見出しであるが、その記事の中身の話は横に置く。このタイトルに込められているのは、橋本蔵相への批判をしつつ、同時に読者の興味を駆り立てる「遊び」とも思えるテクニクだ。「恥知らずの行状」とだけ書かれているが、それがどれほどまでに「恥知らず」なのかはページを開いてみないとわからない。

ウェブメディアにとって、今では当たり前のようになっていく、このなぞなぞ形式のタイトルだが、当時から実践していたのが花田さんだった。

普通なら、行状の中身について触れてしまうものだ。

だが、花田さんはあえて「行状」を伏せた。

「中身を知りたいだろう？ ここに書いてあるぞ。その『恥知らずな行状』が」

新聞の広告、電車の中吊り、そして、書店で立ち読みしてふと目に入ったら最後、話題に大して興味がないのに、その中身が知りたくなってしまうというのは人間さだ。

花田紀凱さんは知っていたのだ。人間がもつとも抗えない欲望は、「隠されているものを見たい」という衝動であることを。

踏み込むこと、論争的になることをいとわない

週刊文春編集部において、花田さんを支えた松井清人さんが書いた『異端者たちが時代を創る』（プレジデント社）という本がある。そこには、編集長としての花田紀凱の圧倒的な懐の深さと、指揮ぶりが活写されている。

彼は、細かいことには一切口を出さない。

文春時代、部下が持ってきた請求書に、何百万円という数字が書かれていても、顔色一つ変えずにサインする。

「はい」

それが、本当に必要な取材経費だったのか、いちいち詮索しない。実際は、情報源を隠すために、2カ月、高級ホテルの一室を借り続けたのだという。

高い経費に何一つ、怯むことも、何のために使ったかも聞かなかったという。

そうして、現場の鎖を解く。

金も出す。責任も取る。その代わり、面白くなければ企画は却下される。だが、いざトランプになれば、彼がすべての矢面に立つ。政治家からの巨大な圧力であろうが、団体からの猛烈な抗議であろうが、決して部下を売ることはない。圧倒的な庇護があるからこそ、

記者や編集者たちは己の限界を超えて特ダネに食らいつくことができた。それは、現代のコンプライアンスでがんじがらめになった組織では到底作り出せない、規格外の熱量と創造の源泉だった。

花田文春の真骨頂は、世の中の焦点となる部分を掴み出し、論争を巻き起こすことに重きを置いている点にあった。彼にとつて、ジャーナリズムにおける最大の罪は、安全圏から石を投げるだけの傍観者になることだ。

なぜ彼は自ら矢面に立ち、論争を喚起するのか。それは、世の中にあるべき正義とは何かを問い続け、人々が日常で抱く素朴な正義感や不安、疑問に対して、メディアとしてどう答えるべきかを常に模索していたからではないか。だからこそ、相手の懐に深く踏み込むことを、そして論争的になることを決して手控えない。いや、むしろいとわないのだ。

その凄まじさを世に見せつけたのが、1992年から1993年にかけて展開された波状攻撃だった。当時の見出しを並べてみるだけで、その殺気が伝わってくる。

● 根来法務次官直撃インタビュー 検察はなぜ金丸に弱腰なのか（1992年10月1日号）

● 馬鹿にするのもほどがある 「金丸と検察を国民侮辱罪に問え」 山崎豊子怒る（199

2年10月8日号)

● 立花隆緊急寄稿 検察幹部は全員辞職せよ(1992年10月15日号)

● 検察もここまで堕ちたか 金丸略式起訴は検察の暴挙だ!(1992年10月15日号)

● 金丸信弁護士全告白 独占スクープ 私だけが知っている検察VS金丸、「取引」の真相

(1992年10月22日号)

政治家の権力腐敗を徹底的に叩き、世論を沸騰させる。それは単なるスキャンダル消費ではなく、民衆が抱く権力への素朴な不信感に対する、彼なりの強烈なアンサーだった。

だが、彼の真髓は政治だけにとどまらない。大衆の欲望や関心がどこにあるかを野性の嗅覚でかぎ分け、世間が感じている素朴な疑問があれば、たとえ「禁忌」であっても臆することなく踏み込んでいく。その象徴が、日本中が祝福ムードに包まれていた貴花田と宮沢りえの婚約解消をいち早く予見し、追い詰めた連続シリーズだった。

● 原因はやっぱり、りえママ 独占スクープ 貴花田・宮沢りえ「婚約解消」の重大危

機(1993年1月7日号)

● TV・スポーツ紙が報道できない 独走スクープ 貴花田・宮沢りえ「破談」への舞  
台裏（1993年1月14日号）

● もはや修復は不可能 独走スクープ第3弾 貴花田・りえ「破談」は最終局面（1993年1月21日号）

● 藤島親方が決断 独走スクープ 貴・りえ「破談」発表のXデー（1993年1月28日号）

● 大関昇進で 独走スクープ 貴・りえ「破談」いよいよ交渉開始（1993年2月4日号）

● 本誌スクープから一カ月 独走スクープ 貴・りえ破談 本誌が擱んでこれまで書かなかつた全情報（1993年2月11日号）

誰もが触れるのをためらう話題に真っ先に火をつけ、論争の渦中へと突き進む。それはジャーナリズムというよりは、ストリートファイトの流儀に近い。

「文春を敵に回すと、こうなるぞ」

その恐怖と興奮を、読者にも、永田町の住人たちにも、そして芸能界にも骨身にしみて教え込んだのだ。

ところが、時代を経て戦場を月刊誌へ移すと、彼が石を投げる「標的」が変わった。

かつては腐敗した権力者に向けられていた牙が、今度は安倍晋三を一斉に叩く「左派的なメインストリームメディア」へと向けられたのだ。安倍晋三に対して熱烈な応援に回ったのは、メディアの偏向に対する彼なりの強烈なカウンターだったのだろう。

- 総力大特集「結論！安倍以外に誰が」
- 安倍総理、新たな闘いへ 総力大特集100ページ！
- 総力大特集「安倍政権はなぜ強い」 国民が安倍晋三を選ぶ理由
- 総力大特集120ページ「米朝会談と安倍総理の戦い」
- 独占インタビュー「安倍総理、新たな決断」
- 総力大特集118ページ「安倍総理は本気だ！」

これを「偏向」と言うヤツもいるだろう。「メディアとして公平ではない」と批判する識者もいるだろう。

だが、彼にとって重要なのは、中立を装って読者を退屈させることではない。世の中の

焦点となる部分を掴み出し、踏み込むことを、論争的になることをいとわぬ姿勢なのだ。どっちつかずでヘラヘラしているメディアより、よほど潔い。

目次に躍る過激な文言や、ストリートファイトのような戦いぶりから、彼を豪放磊落なだけの人物だと想像するかもしれない。だが、実際にお話をすると、驚くほど上品で、極めて理性的な方であることに気づかされる。

味方には仁義を尽くし、敵には容赦しない。それは決して単なる感情任せの闘争などではない。世の中にあるべき正義とは何かを静かに見据え、人々が持つ素朴な正義感や不安に真っ向から答えようとする、編集者としての誠実な覚悟の表れだったのだ。

読者もまた、その真摯な姿勢を感じ取っていたのだろう。

「今月のHanadaは、どんな新しい切り口を見せようとするんだ？」

「花田は、この事件をどう料理して論争にするんだ？」

そんな興味で、雑誌を手取る。それは、自分たちが口に出せない素朴な疑問や怒りを代弁し、世の不条理に真っ向から挑んでくれる姿に、痛快さと一種の希望を見出していたからではないだろうか。

出版界は今、徐々に解体され、整備されたオフィスへと変わっていつている最中だ。

代わりにやってきたのは、コンプライアンスという名の「校則」を守る、行儀のいい優等生たちだ。

彼らはスマートだ。無駄な経費は使わない。リスク管理も完璧だ。

タイトルには数字を入れたがり、メリットを提示したがる。「コスパ最強」や「年収アップ」といった、読者の役に立つ正しい情報があふれている。

正しいが、あの頃のような「殺気」はない。賢く表現するなら「論争」的でない。

読者の素朴な正義感や不安に寄り添い、良識にドスを突きつけるような、あのヒリヒリするような緊張感はない。

ぼくは今、整然としたウェブメディアの海を見ながら、ふとあの時代の雑誌が放っていた、強烈な異臭を懐かしく思うことがある。

当時の容赦ないタイトルには、人間の業が詰まっていた。

欲と、金と、嘘と、そしてどうしようもない悲しみ。それは、きれいなオフィスで、デスクを見ながら会議をしているだけでは、絶対に出てこない熱量だ。

泥水をすすり、建前で塗り固められた人間の裏側を暴き出し、それでも「人々の素朴な疑問に答える、本当に面白いものを作りたい」とあがいていた、野良犬のような編集者た

ちだけが嗅ぎ取れる匂いだった。

あれは、メディアがまだ「野生の獣」だった時代の、最後の咆哮だったのかもしれない。今、ぼくたちの周りにあるのは、消毒された情報と、安全なエンターテインメントだけだ。

だが、人間というのは、本当はもっと野蛮で、もっと汚くて、もっと面白い生き物のはずだ。

花田紀凱という男が道場の真ん中で睨みをきかせ、ファイティングポーズを取っていた頃、ぼくたちはその「人間の面白さ」と、素手で殴り合っていたのだと思う。

窓の外には、清潔で退屈な東京の街が広がっている。

どこか遠くで、獣の遠吠えが聞こえた気がした。だが、それは空耳だったのかもしれない。

### 赤坂の夜と、カリスマの生き様

花田紀凱という男を語るとき、ぼくはどうしても背筋が伸びるような、心地よい緊張感を抱いてしまう。

個人的には、かつて「編集者の私塾」で受けた恩義がある。

ぼくは花田さんの編集者美学に痺れたし、その圧倒的な突破力を心底、尊敬した。編集という孤独な営みにおいて、あの高みに到達できる人間は、そうはいない。

だからこそ、ぼくは最近、梶原麻衣子さんの著書『右翼』雑誌の舞台裏』（星海社）を読み、大いに驚かされたのだ。

そこには、あの赤坂の夜に見た「粹な師範」の姿とはまた違う、壮絶な制作現場の熱気が描かれていた。

校了間際の編集部。24時間消えることのない蛍光灯、そして徹夜。著者の梶原さんは、その編集部のハードワークぶり、現場の切実な状況を伝えている。かつて、コラムニストの勝谷誠彦さんが花田さんの率いる編集部の労働環境を小林多喜二のプロレタリア小説『蟹工船』だとして、冗談で喩えていたが、正直なところ、ぼく自身の仕事のスタイルとは真逆である。

ぼくも編集長を務めた経験があるが、校了日であっても定時の17時には帰りたかった人間だ。「なんで1カ月も前から準備をしているのに、校了が遅くなるのか」が理解できないタイプなのだ。もちろん、原稿の質を高めるためにギリギリまで粘ることは大切だ。しかし、それは事前の段取りの中でやるべきであり、校了日に徹夜してまで粘るべきことなの

だろうか、と常に思っていた。校了日間近で原稿の差し替え、新規取材・原稿があっても、私自身、徹夜は1度しか経験したことがない。

だからこそ、不思議でならないのだ。そんな過酷な環境にもかかわらず、花田さんに部員たちはよくついていくな、と。一つの雑誌を究極までいいものにした、時間を理由に諦めないという観点からいえば、正解なのかもしれない。

それはもう、合理的な枠組みを超えた、花田さん自身の圧倒的なカリスマ性というほかないのだろう。損得ではなく、「この人と一緒に面白い雑誌を作りたい」と思わせる引力。これはもう、リーダーとしての生き方であり、生き様そのものに関わってくる問題だ。

あるいは、これが世代の違い、雑誌作りにかける美学の違いなのかもしれない。

ぼくは、クリエイティブな仕事に没入する熱量を否定するつもりは毛頭ない。若いうちに死ぬほど働いて何かを掴み取る時期があってもいいし、政府が一律に時間を規制することには違和感がある。

あの凄まじい熱量と、狂気にも似た没入感こそが、花田さんの作る雑誌の根底に流れるエネルギーなのだと思う。

ぼくは直前の取材や差し替えを仕組みで乗り越えられないかと考えてしまう。しかしば

くのやり方では、もしかしたらあそこまでの「毒」や「熱」は生み出せないのかもしれない。手法や世代は違えど、その情熱と引力にはやはり頭が下がる。

部員たちには、どうか身体だけは壊さず、これからも花田さんというカリスマと共に、世間をアツと言わせる「面白いもの」を作り続けてほしい。心からのエールを送りたい。